

エコロジー・デザイン特殊講義 第3回（山本太郎先生）のコメント

このたびは、ありがとうございました。私は国際協力を専攻しており、先生の国際的な貢献はとても感激いたしました。ウイルスは利己的なものではなく極めて利他的なものであるという話を以前聞きました。それはウイルスタンパク質が宿主タンパク質と強く結合する結果として宿主の細胞内にウイルスが感染するということからであり、人間が招き入れているともいえるのではないかというものでした。今までの歴史の中でさまざまなウイルスが流行してきたように、ウイルスは人間の歴史の中で、切っても切り離せない存在なのだと思います。それは、今までもこれからも変わらない。生き残るものと生き残らないものがあるなかで、なにか人の細胞は進化していくのかもしれないと思いました。（4年Yさん）

今回の山本さんの貴重なお話を聞いて、またその中で今後、人は根絶が難しいとされる新型コロナウイルスとどう向き合っていくのか（with コロナ）を専門家の方から考えを聞いたというのは、いい経験になりましたし、確かに、情報技術社会の世の中が、どんどん発展していくのだろうと、改めて考えさせられました。

授業終了時にふと思ったことがあって、質問の時に聞きすればよかったと後悔しているのですが、新型コロナウイルスの感染源は、いまだ調査中だと思いますが、山本さんが濃厚だと考えておられる感染源は、動物による新型コロナウイルス発生。アメリカのトランプ大統領がおっしゃる、武漢の研究所から漏れ出したと言われる、人為的による発生。またその他に考えられる感染源についてお聞きしたかったです。（4年F君）

前回先生が講義で仰っていたように、今回のゲストとして来てくれた先生も、ウイルスは倒すべき相手ではなく、上手いこと落とし所をつける、つまりは共存出来るような道を見つける事が大事である。と仰っていた事に納得しました。また私自身、スペイン風から来る新型インフルエンザや、マラリアなどについての知識が疎く、今回の新型コロナウイルスがはじめての規模のデカイ感染症なので、自分自身どう生きていったら正しいのかまだ分からないが、とにかく共存できるような選択肢を作るべきであると感じた。

また、先生に直接質問することは出来なかったが、学生の1人が質問していた、感染症には波があるのはなぜか、や、もしくはコロナウイルスのような未知であるウイルスが世界に蔓延する事は、もしかしたら未然に防ぐ事が出来たのではないか、など、どの質問も私が疑問に思っていた事で、先生が的確に答えてくれてさらに授業に対する理解度が深まった。レジリアンスについてはもう少し理解するには時間が必要なので、また時間がある時に説明して下さると幸いです。（4年K君）

過去のヒトとウイルスの関わりなど、山本さんが実際に経験してきた話は聞いていて人ごとではないのだと思いました。そもそもウイルスとは倒すべきものではなく、ある程度の見切りをつけて共存すべきものだということが印象に残っています。ここで言う「倒す」という捉え方がすでに排他的なイメージを持っている証のようにも思えました。コロナからも分かりましたがウイルスがヒトに与える悪影響は確かにあります。しかしヒトには常在

菌等必要な菌も多く持っています。しかしコロナの恐怖から菌というモノをひとくくりにつまみ、除菌を徹底し消そうとする考えは少し違うように感じます。さらにメディアのウイルスとの闘いを戦争と例え、勝利することに重きを置いた考えは偏った社会になってしまう恐れがあるようにも思えます。感染症予防のためとは分かっているものの、マスクや社会的距離の遵守など少し監視めいた社会は少なからずストレスとなり、行き過ぎると自由が制限される危険性もあるように思いました。山本さんがおっしゃっていた恐怖をあおるのではなく、受け入れるような考えにシフトするには常にその時々の変化に応じて解決していくことも重要だという考えは、複雑で難しいことですが大切なことだと思いました。(3年 Yさん)

山本太郎さんの講義を受けて、特に印象深かったのは、「ウイルスは戦うべき相手ではなく、共存していくものだ」という言葉だ。多くの人はウイルスについて学べば学ぶほど、この言葉に近い答えに辿り着くのではないだろうか。私はウイルスについてたった二週にわたって講義を受けただけだが、ウイルスに対して我々は「共存」という選択肢しかないのではないかと感じた。そもそもウイルスを根絶することは不可能だ。ならば無くすことは完全にあきらめて、ともに生きるしかない。現在では働き方も変わっていて、在宅勤務が多くなっている。休日も自宅で家族と過ごすことが増え、人との接触は少なくなっている。少しずつではあるが、ウイルスと共存する生活に近づいているのではないだろうか。(3年 I君)

現在世界はコロナウイルス問題で苦しんでいるが、過去には影響範囲はコロナ並ではないものの、マラリア、デング熱、コレラ、SARS など改めて様々なウイルスや菌と戦ってきたことが分かりました。このような感染症によって各国、困難を乗り越え社会的にも強くなってきたと思うので今回のコロナもこれまでと同じように乗り越えて、このパンデミックを良いきっかけと捉えてより良い社会の変革を遂げて欲しいと思いました。(3年 K君)

山本先生に、「共生はどこから(私たちからなのか、それとも国家からなのか)始まるのか」、「共生は、どのように表現されていくのか」ということを聞きました。特に一点目について、「私たちだからできることもあるし、国家だからできることもある」との回答をいただき、まさしくその通りであると思いつつ、しかし、国連を中心に各国が協働することがなければ、グローバル・リスク時代には対応することができないのではないかと考えました。ウルリッヒ・ベックを引用しつつ、国際政治学者の遠藤乾は「主権国家システムは地域的な問題に対処していく現実的な枠組みのなかで必要である」と述べ(『グローバル・コモンズ』)、主権国家システムに基づいた国家の協働が求められていくとしています。実際、「一つの国では対処することのできない、越境した人間の安全保障および国家の安全保障上の脅威」であるグローバル・リスクへの対処には、資源、権力を有する国家の存在は不可欠でしょう。山本先生の「国連がなかったらもっとひどいことになっているだろう」とのコメントは、国家間の協力の場としての国連の重要性を的確に表現されていたように思いますが、それでもやはり、いまだ国連は人新世とも呼ばれる現代に適應しているようには思われません。日本を代表する国際政治学者、高坂正堯は「国家とは、力の体系であり、利益の体系であり、価値の体系である」とウィーン体制における「ヨーロッパの協調」の分析を踏まえて述べ(『国

際政治』)ています。高坂の枠組みに則って考えると、国連は力の体系における集団安全保障および勢力均衡原則のために設立された側面が強く、グローバル経済や、全球的価値についてはあまり協調が見られていません。先日の「世界平和経済人会議@広島」では、山本先生のおっしゃられていたように、金融の流れを活用して国際協力を促していくといった枠組みにも触れられ、ようやく、国家間の利益の体系における協力体制が築かれていくのではないかと考えています。しかし、それでもなお、「どうして協力するのか」という問いに関わる「価値観」において、現在私たちのグローバル社会は混乱しているように思われるのです。西欧的・利他的ないわゆるリベラルの精神は、根っこをたどるとマタイの福音にたどり着きますが、中国は全く思想が異なります(国家というハードにおけるOSが違うイメージ)。気候変動をはじめとする地球環境の変化、それに伴うSDGs的課題の悪化、対応における金融や経済の変動などがグローバル・リスクとしてある現代において、まさしく、「共生」という価値観が見出される必要があるのではないかと考えての質問でした。他にも、ネグリ、ハートの〈帝国〉に関する議論などいろいろ述べたいところですが、割愛します。

2点目の質問、「共生の表現」については、勝手ながら、自分の所属しているビッグヒストリーのゼミ(片山先生のゼミ)と山本先生も、共同で何かしたいなと思ってしまっています(笑)。138億年の宇宙地球史であるビッグヒストリーが詰まった家を建てて、そのなかで語らったり、さらに何かを考えだしたりできるような、創造的な空間を作りたいと個人的に考えているところです。ビッグヒストリー絵巻のようなものがそこかしこに現代アートで表現され、同時に、自然に対する奥ゆかしさのある「和」のテイストなんかも盛り込めたら、と文章でパッと表現しきれませんが、妄想が膨らんでいます。

「共生とは何か」といった議論をすることや、それを表現していくことも含めて、山本先生、ぜひビッグヒストリーゼミと共同しませんか!!!片山先生を通じてという形になるかと思いますが、ぜひぜひ、お待ちしております!(笑)

山本先生、今回はありがとうございました!(3年T君)

質問もさせていただいて、いい機会でした。今回の授業で新型コロナウイルスについて、様々な見方から考えました。新型コロナウイルスが流行り、私はウイルスを敵と考えて生活していました。ウイルスが攻撃してくるように思えたのかもしれませんが、しかし、今回の授業でウイルスを敵と考えるのではなく、これからも昔も共存していくものとして改めて再認識できました。質問の際に、ウイルスはその時の弱みを突いてくるとおっしゃっていました。この言葉から、東京に集中している人口や企業、流行を思い浮かべ、今回の新型コロナウイルスは人の密集を気付かせてくれたなと考えました。このウイルスのせいで失ったものは少なくないと思います。私自身、コロナ鬱のように気持ちが落ち込んでしまい、なんでもない日に泣いてしまったらする時期がありました。しかし、この状況を客観的にみると、私はウイルスが流行ったから気づけたこと、見直せる時間を作れたなと考えます。例えばニュースで二酸化炭素が減った報道を見ました。人間が活動的だった数ヶ月前は、このようなニュースを見ることはなかったです。また、私のアルバイト先での社員さんは長いこと、長期休暇を取っていませんでした。収入が減ることはいいことではありませんが、自主要請が心身の休暇をもたらしてくれた人も少なくはないのではないかと考えました。様々な影響が未だに出ており、経済状況なども持ち直さなければなりません。しかし、起こってしま

った以上、ウイルスとの共存を見直すべきだと考えました。(3年Hさん)

コロナウイルスと人類は共生していくしかないと考えます。ウイルスそのものを根絶することは不可能であると思います。人類とウイルスは共生をしてきました。新たなウイルスであるだけで、インフルエンザウイルスのようなウイルスとの付き合い方と変わりないと思います。今回のようなパンデミックが起こってからの対策では遅いのではないのでしょうか。という意見が出てきていましたが、やはり事が起こらないと対策をするのは難しく、お金もかなりかかってしまうので、なかなか難しい問題ではあると思います。しかし、今回のような世界的なパンデミックが起きた事で、世界中の人々の感染対策に対する姿勢や態度がかなり変わってきているのは明白であり、今回のようなパンデミックが風化せずに、感染防止を常日頃するようになれば、事が起きてからの対処療法ではなく、原因療法のような形であり、このようなパンデミックは防げるのではないのでしょうか。(3年H君)

最初の印象は山本先生の経歴が凄すぎて、ただただ頭の良い方で僕自身に理解する事が出来るのか不安だった。ただ、山本先生も僕たち学生に寄り添った講義をして頂いたためとても面白かった。講義の中で集団免疫をつけてコロナウイルスと共生していくという話はまさに「共生」だなと感じた。また最後の質疑応答の場面でワクチンは開発可能という話を聞いて安心した。(3年F君)

ウイルスが動物を経由して私たちの中に入ってくるということを今回改めて理解しました。インフルエンザなどウイルスが流行するのは自然災害と同じようなもので(流行と違い)始まりは止められないと思っていました。しかし、人間が木々を伐採し自然を開拓することにより動物の住処を減らすことが原因で動物と人間との距離が近づいてしまうことが感染症をより身近にしている理由だと知りました。不必要な自然環境への介入や、距離感が、環境問題だけにとどまらず自分たちに不利な状況をもたらしているのだと思えました。野生動物との共生、自然環境との共生がウイルスとの共生に繋がっていくのではないかと感じました。

今日山本さんの話を聞いてコロナ社会は物語であるように思えました。隔離、閉鎖、パンデミック、幻想の世界のここのように思えるけれど、全て現実の世界で起きています。だからこそ私たちのコロナ社会で生きていくためには共生していく必要があると思えました。それと共に、芸術は自由にコロナ概念を広げることができることもわかりました。(3年Mさん)

コロナと社会問題について絡めてかいているので面白かった。写真はどれも衝撃的で特にコレラの写真は胸が痛んだ。私の知らない世界があるというイメージだった。自分にできることは予防すること、人との距離感をとることだと思った。(2年Yさん)

アフリカでは新型コロナウイルスよりも他のウイルスによって苦しんでいるということを知った。今自分の国のことで手一杯になっているから他の国と言ってもアメリカやヨーロッパなど北半球ことばかりで南半球のことはあまりニュースで取り

上げられていない。だから新型コロナウイルスが世界に広まったことによってアフリカでは未知のウイルスがまた蔓延してしまった。確かに自分の国のためでもあるがやはりアフリカなどの貧困の国のために一刻も早くワクチンの開発をしなければならないと思った。また、昔の人たちは疫病を神様からの天罰とっていたということに驚いた。神様に祈っても感染は広がる。どのようにして医療が発達したのかとても気になった。

先生に質問があります。新型コロナウイルスのワクチンはいつ頃できるのでしょうか。また、他のウイルスのワクチン開発と比べてワクチン開発の速度は遅い方でしょうか早い方でしょうか。(2年Aさん)

新型コロナウイルスの初発症例が2019年11月17日に確認されて以来、瞬く間に全世界に広まってしまいました。ロックダウンや入国制限などに加え、オリンピックが延期されるなど日本経済にも多大なる影響を及ぼしていると思います。今日、トランプ大統領夫妻が新型コロナ陽性というニュースも流れていました。ここまで、ひどくなる前に何かしらの対策をもっと迅速に行うべきだったのではないかと思います。一つ疑問に思ったことは、新型コロナウイルスの収束についてです。2003年に流行したsarsウイルスは約半年で収束したようですが、mersウイルスのように新型コロナウイルスも収束の見通しが立たないことはあるのか気になりました。(2年I君)

感染症やウィルスを前線で研究されている山本さんの話はとても興味深かった。特に私が驚いたのはコレラに感染した患者がする下痢の量を測って同じ量の点滴を打って治療するという事だった。コロナの事についてはすぐには質問が思いつかず質問する機会を逃してしまったが、新型コロナウイルスやその他の感染症はサーズなど数年に一回定期的なスパンで新しく流行しているように思えるが、あれは人の手によって意図的に作り出されているのではないのか?ということでした。世の中をここまでのパンデミックに陥れた新型コロナウイルスの存在について少しでも聞きたい機会でした。(2年O君)

質問

台湾は、新型コロナ対策で大きな成果を挙げたことで話題となりました。日本も同様に、専門家を積極的に大臣登用すべきなのではないでしょうか。先生の私見をご教示いただきたいです。新型コロナの対応では、医療従事者の方々の負担が話題となりました。ニュース番組やスポーツの試合において、医療従事者の方々への祈りが捧げられたり、ブルーインパルスが飛んだり、全国各地で花火が上げられたりしました。私が思うに、これらの対応は情緒的で、抜本的な改善をもたらすようには思えません。一般市民ができる、医療従事者の方々へのサポートはどのようなものなのではないでしょうか。先生の私見をご教示いただきたいです。

コメント

講義中でも山本先生が触れられていたが、今回の新型コロナは、世界各国の為政者によって、世界戦争の交戦相手として見なされているように考えられる。

感染症を一種の戦争と見る利点は、国民に対して善としての団結と、悪としてのウィルスとで二元論を提供することで、国民の団結を目指すことができる点である。

一方で、日本で問題となったような、自粛行為を徹底させようとする「自粛警察」の出現や、

ウィルスに近い存在としての医療従事者への差別が横行することにつながる。
また、SARS、MARSのように、2020年に流行しているコロナウィルスの以前に流行したウィルスであっても、効果的なワクチンは存在していないから、今回の新型コロナとの戦争は勝ち目がないように思われる。
為政者には、為政者のための論理として、戦争を感染症に導入するべきではない。そこで、国民に対して示されうる指針として、ウィルスとの共生が想起される。
ウィルスとの共生の形とは、まずウィルスをどのような存在として捉えるかが重要となる。多数の死者を出しながら、ある意味敵である存在と共存することはできるのか、疑問に思った。(2年K君)

私の家族は、4人家族だ。そのたったの4人でさえ、新型コロナウイルスに対する感覚は微妙に違う。

父親はマスクやアルコール消毒をきちんとすれば大丈夫だという、正しく恐れるタイプで、母親はテレビにマスクをしていない人が映ると「嫌ね、これじゃ何時まで経っても収束しないじゃない」と口にする、父親と比べると、敏感に恐れているタイプだ。兄はマスクとアルコール消毒はするが飲み会やカラオケには良く行く、一般的な若者タイプだ。そして、私はもともと一人が好きで出来るだけ家にこもっていたいという、引きこもりタイプだ。

血が繋がっているのに、これだけウィルスに対する考えが違うのだから、面白いものである。ただ、一つ気になることがある。それは、4人も人間が居るのにも関わらず、山本先生のように「ウィルスの目線で見してみる」という立場の人が居ないことだ。これは、私の家族だけに当てはまるのではなく、社会全体にも汎用できるのではないだろうか。

山本先生や他の学者・医師のように、ウィルス目線で見してみる、ということが出来る人が社会全体で見ると少ないために、自粛警察やコロナ鬱、というようなものが日本で生まれるのではないだろうか。

ウィルス目線までは達せずとも、with コロナ・新しい生活などウィルスとの共存を選んでいるようなスタイルが生まれてきている。しかし、何故現在このような状況になったのか、このような事態をこれからも続けていきたいのかそれを多くの人がもう一度考えてみないと、所詮それは応急処置に過ぎず、本当のwith コロナ・新しい生活なんてものは頼りのない虚像にすぎないのではないか。

もしこれを実像にしたいのなら、私たち、とくに私のような引きこもりで、時間のある若者は、歴史を学ばなくてはならないのではないか。前世代の人がこれをする必要はない。勿論、多いに越したことはないが、そういう雰囲気を作ってしまうと少数の人の声は小さくなり、どちらでも良いという人は雰囲気に飲み込まれるからだ。今の日本だって、そうだろう。

雰囲気を作る、ということに必要なのは山本先生や片山先生のゼミ生が取り組んだような芸術・文化が良さそうだ。

私には大した頭脳も優れた美的センスもないが、自分で考え、それを文章に表すということは20年間生きてきた中で最も苦にならない、好きなことである。

多くの人に影響を及ぼすまではいなくても、ほんの数人で良いから私の文章で、どうかして「ウィルス目線で見してみる」ことを出来る人が増えないか、行動してみよう、と今日(10月2日)の講義を受けて思った。本日は、貴重なお話を下さりありがとうございます

ました。(2年Kさん)

ウイルスを倒すべき存在とするのではなく、それよりも失われようとしている生命、経済的に困窮する人々を救うことに注力すべきだというお話がとても印象に残りました。それは、私自身も普段から違和感を抱えていたからです。

以前東京オリンピック関連のニュースを見ていた時に、まだまだ収束しきったわけでもなく、今も感染や不況のあおりを受けて苦しむ人々がたくさんいるのに、IOCのバッハ会長などの地位の高い人たちは戦争に打ち勝つ希望だとか、要は自分たちに都合のいいように言って、自分たちの足元を何も見ていないんだなと感じていました。

もちろん、オリンピックでのアスリートの姿は人々に勇気を与えます。ですがそれよりも大事な命や安心が守られなければ、私は素晴らしいオリンピックだとは言えないのではないかと感じます。世界全体で、with コロナの時代において目線をどこに向けるべきか、一番大事な命を救うためにはどうすればいいかを考える必要があるように思っています。

質問：路上生活をしている人は普通に家をもって暮らしている人よりも感染しやすいのでしょうか。これから冬になり、失業によってホームレスの人が増えてしまった場合、衛生面などの悪化で感染する人も増えてしまうんだろうかと考えています。(2年K君)

今回山本太郎先生の授業を受けて、国際保健学という学問が非常に奥深くこれからの世界にとって重要な学問だと感じました。授業前半でお話してくださったハイチの地震やコレラの話は衝撃的でした。僕は小学生の時に東日本大震災を経験していて、当時の東日本の地震の影響は映像で見てショックだったことを鮮明に覚えています。そのため、ハイチの地震で建物などが倒壊している画像を見て、やはり地震というのは怖いものだと思い直しました。コレラも自分の生活している地域とは無縁のものとは言え、画像を見て話しを聞き非常に怖い病気なんだと認識していなければならぬものだと思います。また、山本先生が現在猛威を振っているコロナの危険性を世間にもっと幅広く知ってもらうためには、映画や舞台にして広めるやり方が効率的だとおっしゃっていて、非常に納得しました。現在から未来に向けてコロナウイルスというものがどういったものなのか語り継いでいくことが医学の発展にもつながると個人的に思いました。(2年S君)

宿主に入り込むことで初めて生存するウイルスのあり方それ自体に意味があると思った。感染という形でしか生きることができないウイルスの存在価値、生きる目的とは何なのかと今考えている。一つ考えられるものとするればそれは記号としての役割だ。例えば、インフルエンザウイルスの流行がニュースで報道されると私は「冬が来て、空気が乾燥しているんだな」と感じる。だから私たちは部屋で加湿器をつけたり、こまめに水分補給をすることで喉を潤すという対策をとるのだ。多分こういうこと何だろうなと思う。昨今流行している新型コロナウイルスのワクチン開発はウィズコロナ世界のニューノーマルにはきっと必要なことだと思うのだが、それはその場しのぎの場当たりの対策だ。勿論、ウイルスが突然変異するものなので、場当たりの対策になってしまうのは当然のことといえる。だがそうではなくて、私が言いたいのはさらに長いウイルスの歴史から見たときに新型コロナウイルス

スという記号が示す部分だ。ウイルスはその時代の弱点を突くような形で現れると山本教授が言っていたように新型コロナウイルスはやはり「自然と人間の関係性」を現代人を問いていると思う。私たちに必要なのはウイルスとの共生、延いては自然との共生である。(2年S君)

今までのインフルエンザやコロナウイルスは、症状が出てから感染を始めるのに対して、新型コロナウイルスは症状が出る前から感染を始めるという事を聞き、恐ろしさを感じました。今までならば症状が出てしまったらなるべくほかの人との接触をしないようにすれば感染を防げたけれど、症状が出る前から感染が始まってしまえば、知らないうちに他人へとウイルスをうつしてしまうので、コロナウイルスは厄介な進化をしてしまったと思いました。もはや根絶するのが困難になってしまったコロナウイルスに対して、人間自体がコロナウイルスに対する免疫を獲得することが、大切なことだと納得しました。また、ウイルスは宿主を必要としているため、人々や動物たちを全滅させないようにしているという考えは、ウイルスは人間にとって有害な良く分からない物質だと思っていた私にとって、ウイルスも生き物だという発想を与えるものになりました。(2年T君)

山本先生のお話を聞いて私は、ウイルスについて誤解していた部分があるなと感じました。ウイルスは、私たちのからだを攻撃し、悪影響を及ぼす悪いものとして認識していました。しかし、私たちの周りにはたくさん存在していて、いつも共存していました。また、体の中に2キロの微生物がいてそれらがいるおかげで自分がいるということに驚きました。微生物が損なわれると、私たちは肥満など健康に影響してしまい微生物は大切な存在ということを知りました。こうしたことを学校で教わるのがなく、メディアや影響力のある人があたかも敵のように仕立て上げみんなを団結しようと、その人たちの都合のいいように使われていて、何もわからない私たちは操られていたのではないかなと感じました。もっと自分から情報を探して、自分なりに考えて物事を判断していくことが大切だなと感じました。

また、今回のコロナを、ウイルスとの闘いや戦争と表し厳しい罰や自粛を強制している国もあります。そうしたことから息苦しさを感ずる世界になっていると思います。直接的な関係はないかもしれませんが、こうした息苦しさが、心の病や最悪の場合自殺というようなことに結びついているのではないかなと考えました。

山本先生は、人が自然に入りすぎたことによって人と動物との距離が近くなりこうしたことが起きているとおっしゃっており、自然からの警鐘と話していました。私もその通りではないかなと思います。これが原因であれば、これからもこうしたウイルスはどんどん出てきて、そうしたときに柔軟な対応ができるかどうかで共存できるかどうかにつながると思います。人からの視点で考えるのではなく、動物や昆虫、自然などの視点から考えることも必要だと感じました。

質問で言おうか迷ってしまったのですが、私はコミュニケーション専攻を考えており、異文化などに興味があります。そこで、山本先生は実際にハイチなどに支援に行った際、コロナで見られるような命の選別や異文化の難しさを感じたことがあればお聞きしたいなと思いました。(2年Tさん)

本日の授業を受けて、災害や経済的不利な立場にある国が感染症を蔓延させやすいことがわかった。

また、感染症の終息には一定人数の感染が必要であることも驚きだった。なるべく感染者は出さないほうがいい、というような考えだったが感染を強要することで得られる終息の形もあることがわかった。さらに、感染症にもさまざまな種類があることがわかり、共生していくうえで理解と許容が前提にあることを学ぶことができた。(2年Nさん)

山本さんがこれまでに社会貢献してきたハイチ地震、ハイチコレラ・アウトブレイク、東日本大震災、ネパール大地震、コンゴ民主共和国エボラ対策、難民支援、平和構築など、私なら仕事でも躊躇してしまいそうなのをその国のためを思っていくことに驚きました。実際にその場に行き、現地の人たちが必要としている目線に向き合いながら実践する国際協力には感動しました。東日本大震災の時私は、小学4年生でした。今でもあの時の恐怖は忘れません。地震が起きるたびに不安が募ります。何年か後にはまた、あのような地震が起きると思うので被害が拡大しないように願いますがその想いは伝わるのか分かりません。東日本大震災やハイチ地震の時もそうですが、現地の心が痛い光景を目の当たりにしたとき、仕事としてではなく、何が山本さんの胸を動かすのでしょうか？
with コロナになった今の社会ではウイルスと共に共存していくのが普通になりつつありますが、ウイルスと人間、もしくは動物と一緒に過ごすようになったのはいつごろに気づいたのですか？(2年F君)

コロナウイルスに対してバイオテクノロジーの技術はどのようにして貢献しているのでしょうか？自分は、医薬品やワクチンなどを作っていることしか思い浮かばないのですが他に微生物及びバイオテクノロジーの視点から考えて何かありますでしょうか？(2年M君)

コロナウイルスによる今後の状況について詳しい解説でとても興味深かったです。質疑応答のところで映画の話が出ていて私が思ったのは、こうしたウイルス感染系の映画がたくさんあるのに経済的ダメージや政治的動きに着目した作品がないことです。(私が知らないだけかもしれませんが)やはり実際に起こってからではないこうした状況は分からないものだと感じました。また講義内でも言っていたITを中心とした社会という点はまさにそうなると思いました。現実世界がいくら悲惨になってもネットワークの世界は半永久的に平和を維持できるので、その世界に私たちが適応していくしかないと思いました。(2年M君)

実際に被災地や、感染症の被害を大きく受けた地域を訪れて、たくさんの人々の治療を行ってきた山本先生は、その原因であるウイルスと共存しなければならないという考えをもっていました。これは、意外なことでした。私たちが想像もできないものを見てきた山本先生だったら、ウイルスなんてなくなっただろうがいい、と考えると思ったからです。きっと、いろんな経験と知識をもっているからだと思います。

印象に残ったのが、ウイルスに勝利するのではなく、守らなければならないものがあるだけだ、というお話でした。ウイルスに対して戦争的な考えを世界が持ち始めているなか、そういう意見をきいて胸を打たれました。同時に、だから戦争は起こってしまうんだと気が付きました。都合の悪いものは敵で、消し去ってしまおうという考えを無意識にもってしまう人類の思考の癖なのだと感じます。それか、本能のひとつなのかもしれません。(2年Mさん)

流行がある程度の人口を必要としているというのは、今感染拡大が止まらないアメリカなどの国の様子からも分かる。日本が早期に拡大を抑制できたのは、休業要請やオンラインでの仕事や授業を開始させたことに理由があるのではないかと思った。オンラインの推進に賛成反対はあるが、他国よりも確実に死亡者や新規感染者が少ないのはその効果が出ていると言っていると思う。どんなこととにかく試してみることが大切だと今回の新型コロナウイルスの経験で分かったのではないか。(2年Yさん)

新型コロナウイルスに感染しているときから陰性になったあとの後遺症のことまで、若年層でも油断はならないとは言われているが、やはり高齢者が重症化しやすいのは事実であると考え。そういった中でスウェーデンが行うようなロックダウンを行わない、ある程度感染を許容し一度感染させ人口の一定割合に免疫を作らせるやり方を、日本でも行なったらどうなるであろうか。日本では65歳以上の人口が3割に迫る勢いで進んでいる。集団免疫の獲得を急速に急激に目指すやり方を選んだ場合、かかってしまい、重症化してしまったり、亡くなってしまった高齢者は、気の毒だという言葉で済まされるのであろうか。そこまでして過激に集団免疫の獲得をするものではないと私は考える。いま日本などが行っている緩やかな政策は、結果としては集団免疫獲得までの道は長くなると考えられるが、急激に流行らせ高齢者の感染者を増やしたり、助かる命も医療崩壊が原因で助けられなくなるかもしれないという状況をあえて作り出すのがいまの日本にあるとは考え難い。そのような状態に持っていくのが相応しくないのは言わずもがなである。その国その国に適したやり方というものが少なからず存在するはずである。頻繁にコロナに関する、韓国、中国、アメリカなどの外国のニュースが報道されているが、そういうものにその都度惑わされる必要はないと思う。国際的に行えることと日本国内で行うべきことは明確に分かれているとも言えると思う。いまの国民の心理や動きとしては、なんとなく外出して良い雰囲気、に世の中がなりつつある、だから出掛けてみようだとか、中国ではウイルスを封じ込めたことをアピールするような報道も見られる、では日本はなぜまだなのかと焦りや苛立ちを感じる人もいると思う。これらはどれも不安から来る「真似」にすぎないと思うのだ。「情報を仕入れること」と、「協力すること」、「触発され真似すること」は明確に異なるものであり、区別するべきものだと、いまの日本国内での国民の動きを見て私は考えた。(2年Tさん)